



新座中だより

〒352-0011 埼玉県新座市野火止2-4-1

TEL 048-478-3668

HP <https://j-niiza-c-niiza.edumap.jp>

新座市立新座中学校

学校教育目標

強く 明るく 考える

「9月号」

令和8年9月1日発行

平和をつくるということ

校長 伊藤大輔

本日から二学期が始まります。夏季休業中、保護者や地域の皆様におかれましては、本校生徒を温かくご支援いただきました。改めて感謝申し上げます。生徒の皆さん、力を育み、力を発揮し、力を合わせてよりよい新座中学校を創っていきましょう。

さて毎年八月は、テレビや新聞等で先の大戦に関する特集を目にする機会が増えます。広島、長崎の原爆の惨状、極限状態の戦場、空襲や学童疎開、戦後の暮らし等、当時の人々の様子や思いを知ることで、改めて戦争や平和について考えるきっかけとなっています。戦後生まれの世代が大半を占める時代となり、また、戦争を体験した人たちの高齢化が進み、生の声で戦争の実情を知る機会がどんどん減ってきています。

私が小学校三年生の頃でした。今は亡き父が、軍用トラックのおもちゃを大事に抱える幼い男の子が写ったセピア色の焼け焦げた写真を私に見せました。それは戦中の幼い父を写した唯一の写真であること、当時は食糧難でひもじい思いをしたこと、機銃掃射の爆音におびえて震えながら一晩を過ごしたこと、戦争が激化し始めた四歳のときに大好きだった佐渡の海を離れ宮城県に疎開したことなどをぼつぼつと話しました。話好きな父でしたが、戦時下の体験は初めて聞きました。父は最後にしみじみと言いました。「平和な世の中になったなあ。」と。平和のありがたみを噛みしめるような口ぶりでした。「へいわ」という言葉が、このときほど私の中で重く、厚く響いたことはありません。

日本に住んでいると戦争やテロはどこか遠い出来事のように思えるかもしれませんが、しかし、世界では現在も内戦やテロ行為、クーデター、ヘイトクライム、ジェノサイドと耳を塞ぎたくないような残虐な行為が行われています。子どもから大人まで非常に苦しい環境に置かれています。こうした卑劣な戦いは、いつの時代でも泥沼化します。何万人もの犠牲者を出して、ようやく終わるのです。もっと平和に解決できる策があり、その方が幸せであることを誰もが知りながら、武力に頼ってしまうのです。どうし

てでしょう？

詩人の谷川俊太郎さんは次のように書いておられます。「理由もなく、戦争をするのはいいことだ、どんどん戦争をしようと考えている人はいないと思う。でも、正しい理由があれば戦争をしてもいいと考えている人は多い。相手をやっつけなければ、こっちがやっつけられてしまうから、したくないけど戦争をしているというわけだ。ぼくら人間は大昔からそうやって戦争をしてきた。戦争はいやだ、戦争はしたくないと思いながら。どうしてだろう？ それは人のこのころのなかに、平和がないからだと思ふ。平和をじぶんの外につくるものだと考えると、平和をめざして戦争をするということにもなる。じぶんのころを平和にするのはむずかしい。でも、まず始めにこう考えてみたらどうだろう？ 戦争はじぶんのころのなかから始まると。戦争をひとのせいになしないで、じぶんのせいだと考えてみる。ひとをにくんだり、さべつしたり、むりに言うことをきかせようしたり、じぶんのころに戦争につながる気持ちがないかどうか。じぶんの気持ちと戦争はかんけいないと考えるかもしれないが、それでは戦争はなくなる。まずじぶんのころのなかで戦争をなくすこと、ぼくはそこから始めたいと思う。」(『おにいちゃん、死んじゃった』(教育画劇)あとがきより抜粋)

平和を希求(ききゅう)する心は育てるものです。国と国との戦争に思いを巡らせることも大切です。と同時に身近な人とのいさかいを解決する手段を身に付けることこそ平和実現の第一歩ではないでしょうか。人と人とが生きていく中であってトラブルはつきものです。トラブルが起こった時に、自分の気持ちや行動を思い返しながらか「誰が・何が・どうなってしまったか・その経緯の中で自分は何をしたのか」など、冷静に自分の心と対峙(たいじ)し、言葉によって解決できる力を自ら育ててほしいです。新座中の皆さんが健やかに成長し、その笑顔が絶えることがないよう、世界にくまなく平和が訪れることを願わずにはいられません。戦後八十一年。今年の夏も父の墓前に手を合わせました。